

JRA競走馬総合研究所スタッフが語る

セラブレッド[®] のおはなし

藤井良和

(JRA競走馬総合研究所) = 文

text by Yoshikazu Fujii

人も競走馬もストレスフル!



牧場などでのんびりしているときはあまり
ストレスもないでしょうが…

現代社会は本当にストレスフルです。ガッリンをはじめ諸物価の高騰、経済不況、異常気象、地震の多発。仕事量は増え、給料は減らされて……これは私のぼやきですが、こんなストレスの多い世の中であっても、人も馬も生きなければなりません。

ストレスを原因とする競走馬の病気といえは胃潰瘍、8割以上の競走馬が罹患していることは科学的に証明されています。ほぼ毎日行われる調教、月に1〜2回の競馬、馬連車での移動狭い(?)住家、夏に多い蚊やハエの襲撃などがストレスを引き起こすと考えられています。実際に総研では、運動によるストレスで消化率が低下することや、長距離輸送により全身の抵抗力が低下して、輸送熱等の発症リスクが高くなることを証明しています。ところが、私たちの予想に反し、競走馬は意外とのんびり生活しているように見受けられます。それは、世話をする厩務員さんなどのひとかたならぬ苦勞があるからです。心身鍛錬の場として調教は避けて通れないし、競馬は競走馬の本業です。そこで、馬と人との良好な信頼関係を築き、馬の能力や状態に合わせた調教を行うなど、色々と考えられた対応をとっているのです。飼葉をたくさん食べるように飼養環境を改善すること、新しい場所を驚かないようにスクーリングさせること、疲勞が蓄積しないよう適切に回復させること

時には放牧に出して休養・リラクセスさせることなど、様々な手法を駆使しているのです。私達は以前、心電図解析によりリラクセス度を観察し、BGMに関する研究をしたことがあります。競走馬は演歌やロックより、イージーリスニングなどのソフトでスローテンポの曲を好むことがわかっています。厩舎で音楽が流れているところも数多くあります。このように競走馬の環境を整え、いい状態で競走に臨めるよう努力がなされているのです。

ストレスには適応と病気の二面性があります。生体にストレスが加わると、交感神経の緊張が起り、この刺激が副腎髄質に伝わりアドレナリンが分泌されます。これが、活力の源、火事場の馬鹿力にもなります。次に、視床下部―下垂体―副腎皮質系の活性化によってコルチゾルが放出され、全身への抗炎症作用の効果が表れます。ある程度のストレスは生体にとっては必要ですが、度が過ぎると色々問題が起ります。

G1馬は、相撲の横綱にたとえることができ、心・技・体が揃ってこそ、一流といえます。技と体に加え、自分の能力を最大限に出せるような強い心が競走馬にも必要です。それはストレスにいかにか打ち勝つかに尽きるかもしれません。しかし、G1馬を世話する人は大変です。それこそ、胃潰瘍になられた方や体調を崩された方もおられ、中には気が休まらないからと転厩される方もいたり…。